

山に親しみ山に想う(18)

—韓国雉岳山国立公園紀行—

〈文・写真〉 岡本

韓国勤務当時、2002年の秋夕(注1)の祭日に雉岳山国立公園内の雉岳山(チアックサン、標高1288m)に登った。雉岳山は、冬季オリンピックが開催された江原道平昌市の南西方向、原州市との中間あたりにある。

以下の本文は、山行より帰宅した日の夜に留守宅に送ったファックス信に若干の添削を加えたものである。

9月20日、21日、22日は秋夕の三連休である。秋夕の前日にあたる20日は、秋夕の祭祀準備で韓国民は忙しい。街中を走る車は至って少なく、多くの店は閉まっているが、祭祀の供物用食材等を揃えるソウルの京東市場は普段以上に賑わっていた。自宅近くのバス停から清涼里駅まで普通1時間程かかるのに、今日は40分で着いた。駅の切符売り場へ急ぐ。5カ所の切符売り場には10m程の列ができていたが、8時45分発の統一号(安東行き特急、10時43分原州駅着、3100ウオン(注2))の座席が取れたのは幸運であった。

列車内は秋夕の帰省客で満員。列車の連結部分にも新聞紙を敷いて腰を下ろしている人もいる程である。乗客の身なりは皆んな小ざっぱり。真っ黒に日焼けした顔に背広を着込んだ中年男性を見ると、着慣れない背広を着て久しぶりに故郷に帰省するというハレの場に出る意気を感じられる。化粧の似合わない中年のおばさんも精一杯のおめかしをしている。誰もかれも、秋夕というハレの舞台で何かしら演じるために帰省するのだ。

乗車して列車の出発を待っていると、おばさんが近寄ってきて、友達グループの席が3号車のここらあたりの席なので、2号車の自分の席と替わってくれないかという。韓国では仲間の絆は異常な程である。おばさんが仲間外れになれば大変なので2号車の席に移った。替わった後におばさんと交換した切符を見ると、終点安東まで7400ウオンのものである。自分の切符の行先である原州駅で指定席の客が来れば、立つか2号車に戻ってことになる。おばさんのところに戻って原州までの切符とまた交換して下車した。最初からおばさんの席の番号を覚えてもらうだけでよかったのだ。とんだ茶番を演じた。

時刻表通り10時43分の定刻に原州駅に到着(注3)。駅頭の観光案内所で「亀龍寺行きバスは、近くのセメリ便宜店前のバス停から41番に乗る」と教えてもらったが、セメリを探すのに少々迷った。何のことはない。セメリとはファミリーマートのファミリーのことであった。韓国人の英語の発音は上手すぎる？ 雉岳山登山口近くに着く亀龍寺バス停行きの12時発バスに乗車した。市街近くにある36歩兵師団の広い駐屯地を經由して、12時30分に終点亀龍寺バス停に着いた(700ウオン)。バス停は雉岳山国立公園管理事務所のすぐ近くである。バスの車回しの広場周辺に5、6軒の土産物店と3軒の民泊がある。その内の予約していた一軒の民泊「コンセ」(野鳥の名前)に行った。誰も出てこない。昨日電話予約を入れた際、主人は祭祀の準備で民泊にいないが、着いたら家に電話をくれと言っていたので連絡すると、15分程でおかみさんがやって来た。主人の実家は秋夕を迎える準備で忙しく客をとるつもりはなか

ったが、わざわざ電話をもらったので受けたと恩着せがましい口調で言う。民泊の建物は3部屋にシャワー1室と台所があるだけの建てつけの悪い安普請である。視点を変えれば野趣たっぷりと言うべきか。

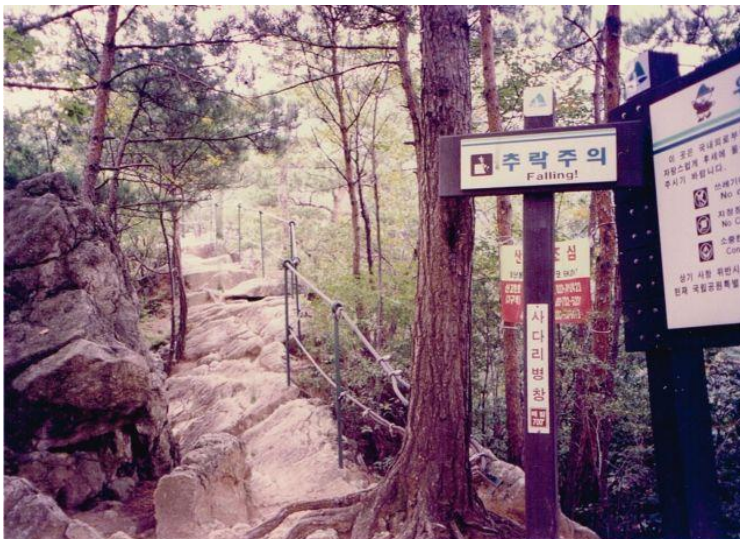


旅装を解いて早速近くの亀龍寺に行った。雉岳山国立公園管理事務所亀龍入山切符売場で2600ウオンを払う。領収券の裏面には、公園入場料1300ウオン、文化財観覧料1300ウオンと書かれ、管理事務所長と亀龍寺住持の印が押されている。山岳地帯の国立公園内には重要な寺が存在するので寺に寄らなくても文化財観覧料名目で寺に払わなければならない(注4)。寺は管理事務所の入口から約800m先にある。正式名は、大韓仏教曹溪宗亀龍寺、禪宗系である。667年(新羅文武王6年)に韓国教科書に出てくるほどの有名な僧義湘大師が創建した。名前の由来は、現在の大雄殿の位置に池があり、9匹の龍が棲んでいた、義湘が仏道の力で追い出し、池を埋め立て寺を建てたことから九龍寺と称した。その後九と同じ発音の亀に替えた。大雄殿前には「9月7日水害義捐金の法会」の大垂幕が懸かっており、傍では息子に手をひかれて大雄殿まで上りついた老母が殿舎の前で拝跪し、四方に向かって拝んでいる。韓国では仏教がわが国以上に生々しく息づいているのは確かである。寺院の周りにはドングリの樹木が多い。「養木のためにドングリは拾わないで」の垂幕があるが、お構いなく多くの人が拾っていた。トリムック(注5)を調理するのであろうか。仏に拝跪するのも、注意書に反して境内のドングリを拾うのも、ともに素朴な庶民の心情であろう。



民泊に戻り、1チャンネルしか映らないテレビを観ているうちに寝込んでいた。2時間程して目覚めるとオンドル(注6)が入っていて部屋は暖かくなっていた。午後5時過ぎ、溪流の傍の小さな食堂「ムルレパンア」(水車)でピピンバップを食べた。素朴な田舎の味だった。民泊の部屋でこの日のメモを書いていると、おかみさんが近くで拾ってきたと言って祭祀用供物の生栗を持ってきた。ただ一人の宿泊者の自分に気を使ってくれているのだ(注7)。民泊のベランダからの眺めは、隣の民泊の屋根が下に見えるだけで、真っ暗闇である。こんな漆黒の闇は見たことがない。視界の端、遠く豆粒ほどの電球の灯火が一層闇の深さを強調していた。

翌21日は6時に起床。オンドルが少々熱すぎた。チョコバーとポカリスエットで朝食に代えた。民泊の人は秋夕の祭祀のため不在だったので、ありがとうのメモを残して6時半に民泊を出発。5分程先の亀龍入山切符売場で2600ウォンを払い、亀龍寺は素通りして、舗装された参道から溪流沿い登山道に進む。道の両側は栗林である。朴正熙大統領は1970年代にセマウル運動(新しい村造り運動)を展開した際、植林には食料になる栗などを植えさせた。そのセマウル運動の成果がここにも及んでいるのかな、と思った。リスが道を横切る。栗やドングリが落ちるポタリという音が意外に大きく聞こえる。溪流の瀬音。野鳥がキツキツと鋭く鳴く。7時半に道標「毘盧峰(雉岳山最高峰)3.2km」「細簾の滝0.5km」「亀龍寺1.6km、切符売場2.5km」を通過した。ここまで緩やかな道を時速2.5キロで歩いてきた。7時50分に毘盧峰まで2.7km、標高500m地点にある細簾の滝に着いた。滝は高さ10m程の二段で変哲もない。掲示板には「これより2.7kmは急峻で危険なところが多く、心臓病などのある方や高齢者は入山しないように。毘盧峰往復に6時間要するので、午後3時以降の入山を禁止する」とある。韓国では国立公園内でのコンロ使用や野営は禁止されており、日没までに下山しなければならない。ここで慣れた足取りの登山者が追い抜いて行った。登山者に出逢ったのはこれが初である。標高600m辺りでダダダーという機関銃のような音がした。至近の幹に首の周りに橙色のマフラーをしたキツツキの姿を初めて見た。8時20分に毘盧峰まで2.2km地点に着いた。30分で500mしか稼いでない。やはり急峻だ。両側は深い谷で所々にロープや鉄鎖が張ってある。8時35分、標高700m地点のサダリピョンチャンで一息入れた。滑落注意とある。この先は岩稜を縦走するところでも最も用心すべきところだ。岩に塗られた黄色のペンキの通りに慎重に進む。毘盧峰まで0.9km地点で易しい立石寺ルートから登頂し下山してくるグループに出逢った。若夫婦と親子4人である。10時15分に毘盧峰まで0.3km、標高1170m地点を通過し、10時45分に毘盧峰1288m山頂に着いた。登頂直前の30分間は300mしか進めず、時速600mであった。



山頂付近は灌木帯である。小白山(注 8)山頂付近のような御花畑の植生は見られない。山頂は 10m、40m 四方の平坦な岩山である。小さな石碑に愛想もなく「ピロボン(毘盧峰)1288m」と刻んである。その側に、小石を積み上げた三角錐の石塔、高さ3m程のものが2基建っている。生憎霧が出て視界が利かず、周囲の景色は全く見えない。山頂には自分一人である。サブレとポカリスエットで昼食を摂った。雉岳山は最高峰の毘盧峰を中心とする周辺の峰々の総称である。雉岳山の山名由来は、山頂の掲示板によれば、「昔、紅葉が美しい山だったので「赤岳山」と称していたが、その後、この地方のキジ(雉)にまつわる伝説が借用されて雉岳山になった」という。昼食を摂っていると、両親と小学生2人の4人家族と青年2人連れが立石寺ルートから登ってきた。



11時10分、立石寺コースから下山することにした。立石寺を経由してホワンコル入山切符売場まで4.1kmである。毘盧峰から下って2.5km先にある立石寺の参道までロープや鉄鎖はなく、危険箇所はない。毘盧峰から1.3km下りても標高は1140mだったが、その後若干急な下りとなり、13時に標高

720mにある立石寺に着いた。寺から先は舗装路の参道である。13時35分にホワンコル入山切符売場に着き、さらに30分でウイホワンコルのバス停に着いた。バス停周辺には、レストラン、モーター、高級民泊があり、リゾート地の雰囲気がある。昨夜泊まった亀龍寺辺りの民泊とは雲泥の差である。売店の主人が登山姿を見て、バスは14時55分にあると、間わず語りに教えてくれた。バス停に行くと、雨除け程の小屋はあるが、バス停の名前も時刻表もない。「時刻表はないのか」と誰かの落書きがあった。15時20分に原州駅に着いた。

原州駅は秋夕の祭祀を早暁に終えて、ソウルに戻る人々で混雑していた。長い順番待ちの末に、無窮花号一般室立ち席(4800ウオン)が買えた。通路は立ち席の客で立錐の余地もない。リュックを敷いて坐り持参の文藝春秋を読んで時間を潰していたが、ふと本から目を外すと、偶然にも山の疲れが癒される美しい情景を目にすることになった。傍に60過ぎのお婆さんが立っていた。その前の席の人が途中で降り、少しの間席が空いた。お婆さんは立ち疲れていたの指定席券を持つ次の客が来るまでと思って坐った。列車が動き出して少しして、指定席券を持った高校生くらいの若者が来た。その席の傍まで来てお婆さんが坐っているのに気付くと、背を向けて知らない風を装った。そのうちお婆さんは気付いて、若者に坐れと勧めたが、若者は最後まで固辞し、終点の清涼里駅まで立続けた。唯、それだけのことであるが。

17時47分定刻に終点に着いた。乗客はハレの秋夕の営みから、日常に戻っていった。

<コースタイム>

雉岳山国立公園管理事務所亀龍入山切符売場(登山口)6:35—亀龍寺 6:50—細簾の滝 7:50—雉岳山毘盧峰 10:45~11:10—立石寺 13:00—ホワンコル入山切符売場 13:35 (コース距離約 9.8 キロ)

(注 1)秋夕(チュソック) 韓国では旧暦 8 月 15 日(中秋節)の日に祖先祭祀や墓参を行う。旧暦 8 月 15 日の前後 3 日間は祭日とされており、帰省して墓参をする。帰省ラッシュが起こり、鉄道も高速道路も大混雑する。秋夕前に墓の雑草刈り(伐草・ポルチョ)を行う。

(注 2)2002 年当時のウオンの為替レートは、1 円=約 10 ウオン

(注 3)当時コリアタイムと言って、韓国人は時間にルーズであったが、韓国国鉄は定刻を守っていた。日本統治下時代の日本国鉄の伝統が残っていたのだろうか。

(注 4)韓国仏教の寺は山岳地帯にあるため国立公園内に有名な寺が存在する。我が国の江戸時代とは異なり、寺が平地に下りてきていない。例えば、伽倻山国立公園の海印寺、俗離山国立公園の法住寺。

(注 5) トリムック ドングリの実で作ったトコロテン風の食べ物。

(注 6)オンドル(温突) 薪や練炭を焚いて暖をとる床暖房。床の隙間から一酸化炭素が漏れ、中毒死する事故がしばしば起こった。

(注 7)秋夕の祖先祭祀の供物として新酒、松葉蒸し餅、ナツメ、栗、柿、梨などが供えられる。

(注 8)小白山 慶尚北道、忠清北道、江原道の三道の境界にまたがる 320 平方キロの小白山国立公園にあり、最高峰は 1439m の毘盧峰。2002 年 8 月 17 日~22 日の間に太白山と共に登った。